

異聞 島崎こま子 たなか踏基

梅雨明けと同時に、今年は猛暑到来し、TVで死者が出たと、連日熱中症予防法を報ずる有様。関東は今日も暑い！実は例年暑さを避け、近くの森に退避して公園で私は本を読むことが通例であるが、今年は特に書齋の窓の簾を外し、外側によらずを張り時々散水するようにして、書齋でも本が読める環境を整えた。読後感を記すが、暑い夏を一層熱くさせた一冊の本であった。概略目を通した後、再度の読了に一週間程を要した。

昔同人誌「えぞうぶ(ハイソップ)」の仲間で、松本で塾経営の守屋義雄君と電話で、私の次作「奇妙な猫たち」の序文を、依頼できる人は居ないかと相談したのが切欠である。ある反体制派ジャーナリストの著作について紹介を受けた。本は三百数十頁に及ぶ長編ノン・フィクションであった。この範疇の作品は、今まで柳田邦男の作品を少し読んだ位であったので興味が湧いた。

著作は守屋君の大学先輩の一人、京大仏文卒の梅本浩志氏著、『島崎こま子の「夜明け前」』という作品である。「治安維持法」渦巻く京都に暮す、文豪島崎藤村の姪の島崎こま子を描いている。大正二年(一九一三年)四十一歳の藤村は、妻冬子が先立つた寂しさの故なのか、手伝いに来ていた姪のこま子を闇に襲い、妊娠させ仏国に逃げた後に小説の「新生」モデルともなった女性である。これは、藤村ファンなら周知の事実であろう。

藤村と姪のこま子の恋愛については、芥川龍之介、広津和郎、林芙美子、河上肇等、作品「新生」もしくはわ救貧院のルポ、あるいは「夜明け前」の獄中評を通じて批判的な見解が多い。作者は従来説と異なる視点から、第一章のプロローグで、二人の愛を捉えているのがとても共感できた。中世

ヨーロッパ・ルネッサンスの中心的存在のアペラーズとエロイーズの物語と同質だという観点である。少なくとも小林芙美子のルポの如く、女性の視点で、藤村や長谷川博を卑劣男と断じてはいない。

第二章「こま子の「夜明け前」」は圧巻である。島崎藤村はその後、大作「夜明け前」の創作に打ちこむ。一方の島崎こま子は、三高洛水寮の賄婦を皮切りに、一転して京都大学社会科学研究所(京大社研)合宿所の寮母として、最も危険な場所にこま子は身を置く。体制変革を目指す日本の学究徒メツカ、京大社研を襲う特高警察と壮絶に戦う左翼活動家、島崎こま子の「その後」を詳細に描き、最後は赤貧で行倒れ板橋救貧院に収容される境遇にまで落ちぶれる。回復後に婦人公論に手記発表、やがて郷里妻籠に返るといって一生である。偉大な叔父を愛したばかりに、悲惨な運命に翻弄されたこま子、藤村「夜明け前」に比す題を冠して、見事な渾身の文学ルポルターージュである。

当時ノンポリであった私にとって、本の内容は正直言つて難解だった。何故なら作者の思い入れの強さからか、在学中「学園評論」元編集長の切口のためか、伏線の「京大ケルン」結成者たち、左翼学生運動の指導的闘士、獄死の永島孝雄や布施杜生の活動状況が延々と記述されているからである。梅本氏の走る文体は、むべなるかなの真骨頂と一見みえるのである。しかし権力闘争で散った若者への作者の鎮魂のメッセージともとれる折角のくだりが、私には逆に読んでいた冗長で退屈だった。それに比して、島崎こま子が、学生活動家に同志愛を感じて長谷川博に身を任せて妊娠、女兒「紅子」を産むのだが、年下の夫の刑務所帰り後の裏切りのくだりの描写が簡単に過ぎるのである。勿論そういう時代であることは理解できるのであるが。明治文壇の頂点で絶頂期を迎え、「夜明け前」を完成させて燃え尽き症候群的状态

の藤村を、異聞こま子の婦人公論手記「悲劇の自伝」が追討ちを掛けた。私に気軽に読める作品ではないと自覚させた原因は此処にもあった。

第三章「『狂』の世界」は付けたりでである。ロシア作家ガルシンや智恵子の「狂」に、座敷牢の藤村の父や姉を重ね合わせたエピソードである。最後に、梅本浩志氏は、本の巻末のあとがきで、木曾の山中の生活を以下記している。

私が毎年夏、暑を避けて、地図にも記載されていない信州・木曾路の山奥二週間前後逗留するようになったからもう十数年になる。旧中仙道(現国道十九号線)も本山宿に近い贄川(じえがわ)の入口に建つ「これより木曾路」の石碑近くから山中に入り、標高一〇〇〇の地点に到達する。まさにここは木曾山中である。「夜明け前」の舞台の端だと言えは言える。冷たい水とうまい空気と鮮やかな緑がこの上ない。馳走の山の孤島だ。(中略)とりわけ島崎藤村の作品を、この木曾の山中で読むのは至悦としか言いようがない。「夜明け前」や「家」などを読んでいるときなど、その舞台となった馬籠、妻籠、中津川、木曾福島、奈良井宿などを訪ねてみたりするのだが、藤村の描いた世界の跡を直接確かめられて、味わいも深くなる。

避暑には、確かに木曾は格好の場所である。

自然との共生を熱く語る京大文卒の守屋君は現在、木曾の山中の旧檜川村桑崎にある元分校を山荘と称し、実験塾を開設している。どうやら前者巻末で梅村氏のいう木曾の山奥とは、此処ではないかと拝察した。私も木曾福島の宿に滞在したことがある。あれは丁度お盆の頃で、家内と二人して町の盆踊大会に気軽に参加した記憶がある。

梅村浩志氏に、八月末木曾でお逢いして、次作「奇妙な猫たち」の序文をお願いする予定でいる。

了